

ジェンダー・フリー

性差の基準から考える

東京都国分寺市が企画していた人権講座が、「ジェンダー・フリー」という言葉を巡って中止されたという。
(二〇〇六年一月三十日 朝日新聞) この講座で講師に名を連ねていた女性学研究者の上野千鶴子・東大大学院教授は記者会見を開いて、「言論・思想・学問の自由への侵害だ」とする抗議文を発表した。

この「ジェンダー・フリー」について、事業を委託した東京都教育庁は「この用語が男らしさや女らしさをすべて否定する意味で用いられることがある」とした上で、「講座でこの用語が使われる可能性があるなら実施できない」という判断を国分寺市に示し、同市でこの企画が取り下げられていたというのだ。

私は、東京都がなぜ「ジェンダー・フリー」という用語に固執するのか、そのときはわからなかった。インターネットなどで検索していると、東京都では当初「女らしさ」・「男らしさ」という固定観念をなくし、性別にとらわれない教育を目指して、この「ジェンダー・フリー教育」を導入していたことが判った。

東京都議会の定例会で、石原東京都知事は(ジェンダー・フリー論が)「ひな祭りやこいのぼりといった伝統文化まで拒否する極端でグロテスクな主張」だと述べた。また「男と女は同等であっても、同質ではあり得ない」。

男女の区別なくして、人としての規範はもとより、家庭、社会も成り立たない」というように、ジェンダー・フリー教育を公人として批判している。

確かに男女の同質化が極端に進むと、後でも見るように、教育現場などでロッカーや下駄箱の男女別の禁止だとか、「男女」の名詞を「女男」に変えるなどの行き過ぎを生み出す。だからといって、石原慎太郎のように教育指針として採用したものをバツサリと切り捨ててしまうのは、いかがなものだろう。彼の言葉の端々に「伝統への回帰」や排外思想などを感じるのは私だけだろうか。

上野教授自身「この用語を使わない立場だが、他人が使うことに反対するものではない。公的機関がこうした用語統制に介入することは言論・思想統制だ」と述べているが私も同意見である。しかし東京都の対応も含めてここで問題になっていることは、単なる「ジェンダー・フリー」という用語の意味作用だけに止まらないと思う。

ジェンダー・フリー教育とそれをめぐる状況

ジェンダー・フリーというのは、東京女性財団のハンドブック『Gender Free』に記載された、「社会的文化的性差からの自由」を目指す考え方である。ただ、この用語は世界共通の考え方ではない。英語圏では「ジェンダー・イクオリティ」とか「ジェンダー・エクイティ」（直訳すれば「男女同権、同等」）などが一般的で、

「gender-free」という言葉は存在しない。唯一、アメリカの教育学者であるバーバラ・ヒューストンが「ジェンダーの存在を意識しない」という意味で使用しているにすぎない。

ヒューストンの主張は、ジェンダーによって起こる差別や格差に敏感になって教育を進めるべき（これをジェンダー・センシティブな教育と呼ぶ）というもので、日本において「社会的文化的性差からの自由」運動にジェンダー・フリーという用語が用いられるようになったのは、もともととはバーバラ・ヒューストンの主張の読み違いによるものだったのである。

その証拠に、日本政府の内閣府男女共同参画局は、「（教育現場の）一部に、画一的に男女の違いを無くし人間の中性化を目指す」という意味で「ジェンダー・フリー」という用語を使用している人がいますが、男女共同参画社会はこのようなことを目指すものではありません」と説明している（内閣府・男女共同参画関連用語集より）。ジェンダー・フリーという用語は、アメリカでも、日本政府でも、国連でも、公式には使われていないのだ。

このような背景を持ちながらも、日本の教育現場では根強く「ジェンダー・フリー教育」が支持されている。前述した東京女性財団のハンドブックより引用してみる。「男女平等」という用語は、これまでおもに制度や待遇面での、男女間の不平等の撤廃をテーマにして使われてきましたが、最近ではそうした不平等問題の背景にある、人々の『心』のありかたに関心が払われるようになってきました。：性別に関して人々が持っているこうした「心や文化の問題」をテーマにするために、このハンドブックでは「ジェンダー・フリー」というコトバを使っていくことにしたのです。」

社会的文化的性差である（とされる）ジェンダーにとらわれず、個々人それぞれが自分らしく生きるための指標として、このジェンダー・フリーという言葉は特別の意味を込められたということができる。

教育関係者の中で、特に女性の権利を守ろうとする人たちは、学習指導要領などの外圧と闘いながら、性による不平等の少ない教育現場を一步一歩かち取ってきた。理論の読み違いにせよ、ジェンダー・フリー教育が広がることによって、結果的に女性の権利が拡大してきたのは事実である。

しかし一方で弊害も起こっている。学校でクラス名簿を男女別から男女混合にするというのは、実際に多くの学校で行われているようだが、それが行き過ぎると、例えば運動会などで子供に「がんばれ！」と声を掛けただけで、保育士から「ジェンダー・フリーに反する」などと言われたことが報告されている。明らかに価値の逆転が起こってしまっているのだ。

極め付けは、昔話の主人公、鬼退治で有名な「桃太郎」を、女性の「桃子」に変更するというもので、世間で支配的な「男性優位」の風潮を批判するあまり、全く逆の思想になってしまっているという印象を持つ。

男女の平等を目指したはずの教育が、かえって不平等を生んでしまう矛盾。冒頭あげた東京国分寺市の対応は、その氷山の一角にすぎないのかも知れない。男は強く女は弱いものというステロタイプと、その裏返しとしてのジェンダー・フリー教育という二項対立では、いつまで経っても「心の平穏」は訪れないと思うのだ。

こういった傾向は、なにも今に始まった事ではない。八〇年代、欧米や日本で活発に論議されたエコロジカル・フェミニズムも同様の問題を孕んでいた。次章では、このエコフェミニ論争について考えてみたい。

エコフェミ論争と現在

八〇年初頭、アメリカのエコロジカル・フェミニズム運動を担った、イネストラ・キングは、地球の環境破壊と、核による人類絶滅の脅威は、いままで女性の身体や性を抑圧してきた男性優位の思想によってもたらされたと述べた。

七〇年代のオイルショック以降、環境保護や反原発運動が各地で盛り上り、「ウーマンリブ」の限界を超えようと、「身体の自己管理」を目指した女性たちが、このエコロジーの広がりをも、家父長制のイデオロギーに支えられた産業主義の矛盾と考えて、積極的にこの運動に関わっていった。

こうして広がっていったエコロジカル・フェミニズム運動は、産業主義に対するオルタナティブであり、フェミニズムとエコロジーとを、社会のパラダイム・チェンジという同一の地平で眺めることの必要性を訴えた。フェミニズムがめざす男性と女性の関係の変革も、エコロジーがめざす自然と人間との関係の変革も、根底ではつながっているという訳だ。

日本でのエコロジカル・フェミニズム論者である青木やよひ氏は、そんなフェミニズムとエコロジーの可能性を追求した女性の一人である。彼女によれば、文明化以前の「未開」社会では、文化概念である「男性原理」・「女性原理」がその社会のなかで均衡を保っていた。しかし文明化によって「男性原理」が肥大化し、そのバランスが崩れてしまった。いまやわれわれ現代人に求められているのは「女性原理」の復権である。とりわけ「産む性」としての母性機能ゆえに、自然により親和的であるという女性の身体性を手掛かりにして、自然界のエ

コロジと共に、身体のエコロジを回復しなければならない。という主張を展開されている。

上野千鶴子氏は、青木氏がこのように「自然」／「文明」、「女性原理」／「男性原理」という具合に差異を固定化させていることを、単なる二元論だと批判する。「文化／自然の二項対立のうち、自然の側に女性を割り当てる男性優位の文化イデオロギーを実は前提とし、受け入れている」という上野氏の批判は、確かに的を射たものであると思う。

つまり青木氏は、反近代という理念を言うために近代を否定し、それ以前の社会を肯定的に描きだすのである。それは彼女が依拠するイバン・イリイチという男性イデオログの視点からみた近代批判であって、その意味で逆説的に男性優位の文化イデオロギーを無批判に受け入れている。

イリイチの近代批判については、彼の「シャドーワーク」という概念のあいまいさが、多くのフェミニストをして、彼を「アンチ・フェミニズム（イスト）」と言わしめる所以になっている。

イリイチは労働を「生産労働」と「非生産労働」とに分割し、それぞれ男性と女性に振り分ける。家事・育児労働を含む「非生産労働」＝シャドーワークは、主に女性によって担わされ、その結果ジェンダー差別が構造化されると言うのである。

上野氏によれば、この「シャドーワーク」という概念は、賃労働（市場化された生産労働）の残余カテゴリーであって、女性に固有の労働形態ではなく、そしてそれは育児・家事という女性に押しつけられた労働を、その中に含みはするものの、けっして育児・家事労働そのものを表現するわけではない。この「シャドーワーク」の一般化は、女性・子供・老人・心身障害者・下層労働者階級・第三世界の人々に共通の視点をもたらし「しはしても「決してそれらに還元することはできない」のである。

イリイチは、彼自身が描定する「近代」像にあわせてフェミニズムをカリカチュアライズ（＝戯画化）してい

る。現にアメリカ・バークレーのフェミニスト達は、カリフォルニア大学に講義に来たイリイチのあまりの差別者振りに対して、その場で彼を徹底的に糾弾し、自己批判をさせているくらいだ。

そしてこのフェミニストの敵イリイチに依って、「女性原理」を過大評価する青木氏を、上野氏は、「イリイチ派フェミニスト」、「性差のマキシマイザー」（最大化論者）と言い切ってしまう。この上野氏の態度はものすごく感情的だ。

しかし、性差を「マキシмум・ミニмум」というように分け、青木氏の近代主義を批判している上野氏にあっては、自身の論理矛盾には気づいていない。「何でも平等」か「差別なき区別」かという、当時の世相に対して上野氏はこのように論じているのだが、性差というのはあくまで（生物学的な意味で）男女の関係の束であって、それを最大／最小という具合に二分できてしまうほど単純ではない。

つまり青木氏だけでなく上野氏も、性差を認めるか認めないかという論争に入ることによって、戦前の「近代の超克」論争同様の轍にはまってしまっているのである。これでは世界はもとより、本来共闘すべきパートナーさえも救えないのではないだろうか。

江原由美子氏はこの論争を評して、「近代主義と反近代主義の双方の言説を、ともに女性に即して解体していくことこそ、今の女性解放論の課題である。なぜなら、その対立はそれ自体、近代社会システムの一部であるからである。」と述べているが、ほんとにその通りだと思う。なぜなら「近代」を超えようとしたエコロジカル・フェミニズムが、「近代性」に埋没してしまったなんて、ほんと洒落にもならない話だからだ。

母性とエコロジー

もう一つ、エコフェミ論争の中でポイントになるのは「母性」の評価である。青木氏が性差のステロタイプを解体していく際に引き合いに出すのが、シュラミス・ファイアストーンの『性の弁証法』における「生殖革命」という提起である。

ファイアストーンは女性を妊娠という「雌の屈辱」から開放するために、試験管ベビーや人工子宮といった科学技術の開発を提唱する一方で、性の自由化としてそれまでインセスト・タブーであった近親相姦や、大人と子供間のセックスなどを推奨している。

この著書が世に出たのが一九七〇年だから、もう三十年以上前ということになるが、不幸なことに、このファイアストーンの「予言」は実際に現実のものになった。今やクローン技術や分子生物学の飛躍的な進歩によって人間の「優性品種」化が懸念され、フィリピンやタイの国々では絶対的貧困の為、十歳前後の幼い「売春婦」の存在という悲しむべき現実がある。

しかし青木氏はこうしたファイアストーンを「科学主義信仰と機能的合理主義の申し子」として退ける一方で、自らも昔は科学技術の力を借りて妊娠や出産という「負担」から開放されたい気持ちを共有していたのだという。

しかしそんな青木氏が決定的に問われたのが、バラ色のはずの科学技術の進歩によって、枯葉剤などの近代兵器がベトナムの女性に雨と降り注ぎ、彼女達の生殖細胞を汚染してしまった現実と向き合った時であり、アメリカ

カ原爆資料館で「核兵器は、人類にとっても文明的な戦争の手段だ」と誇らしげに言われた時だったという。

ここにいたって現代社会の「人間」（＝マン）というのは、結局「男」（＝マン）であり、科学技術に彩られた「男の論理」でしかなかった。だから人間の身体性を徹底的に無視する科学技術への素朴な信頼を捨て去って、人間の身体性に親和的な「女の論理」をつくろうと決意し、それが「母性」の復権という主張につながっていく。

ここで青木氏という「母性」というのは、もちろん女性と子供の関係という一面的な問題ではなく、「近代的自我とは違う母性我」であり、孕み産み、弱いものと手を取り合う能動的なものである。

ただし、それを主張した、高群逸枝の「日本の母」イデオロギーが、戦前・戦中にもものすごい影響力を与えたように、「母性」＝「天照皇大神」という天皇制神話に色濃い日本社会が、容易に「母性ファシズム」になる危険性は高い。

彼女の「母性」の復権という提起は、身体の社会性、自然との親和性を取り戻していこうという試みとして理解することはできるが、彼女の「天なる父と母なる大地」という解放イメージは、抽象的すぎて実際には適応できないと感じる。一方的な愛（＝物資）を供与する存在として母親（＝自然）と、それを享受するだけの子供（＝人類）がイメージされ、その結果として、生体系を無視した森林の伐採とか、石油など地下資源の収奪に道を開く。

また反対に自然保護の立場に立てば、「あるがままの自然を守れ」とか、環境破壊のことを「自然のレイプ」だとか表現するのに顕著な、自然の積極的・能動的な要素が考えられなくなる。結局、白神山地の「手付かずの原生自然を守れ」というような現状肯定になってしまっただろう。

ともあれ、このエコロジカル・フェミニズム論争が起こった八〇年代当時と比べて、状況は何も変わっていない。エコロジカル・フェミニズムが投げかけた問題提起は、エコロジー危機というアクチュアルな、また差し迫った状況に対して、女性はどうのように対応するのかを問うものだったし、前章にとりあげた、ジェンダー・フリー教育がめざす「心の平穏」という課題も、テーマこそ違うものの、荒廃する社会不安に女性の社会参加を促そうとするものだった。

残念ながら、男性優位社会を批判し、逆に女性優位社会をめざしてしまったジェンダー・フリー教育も、自然と女性を同一視するエコロジカル・フェミニズムも、ともに近代主義という枠組みの中で、目指す方向を見失っている。

私は、女性が女性らしく生きる社会をそれとして追求めるのは展望が無いと感じている。男性も含め、現実の社会矛盾に対する働きかけや、環境保護の運動を担い、活動していく中から、ともに考えていきたいと思う。

(2006)

森絹江氏による感想文（メールより転記）

この感想文であるが、二〇一四年の年末に、友人主催の飲み会で同席した、フリーライターの森絹江氏へ、全くもつ

て失礼ながらこの（ジェンダーフリー）原稿をお渡したところ、森氏は私の勝手な働きかけに呼応され、丁寧な感想まで寄せて下さった。

その後、森氏は二〇一五年の七月に、それまで患っていた癌によって逝去されてしまったが、ご冥福をお祈りすると共に、そのご厚情に心より感謝を申し上げます。

イスラム国は、深夜になって急展開。

おかげで昨晩は、深夜までテレビを見てしまった。

それはさておき、原稿書かねばと思いつつ、

なればこそその逃避行動で、いただいた2006年論文について、少し。

全体の構成でいうと、冒頭のジェンダー・フリーで問題となっていること、が、途中でどっかに吹っ飛んでしまった印象がある。

それで、結局、何を言いたいのか、わからなくなっているのですね。

で、第2節について、これは指摘しておきたいのですが、

運動会の話とか、桃子の話は、おそらくネット情報でしょうが、ガセです。

ひどい話になると更衣室も一緒だとか、そんなものの流布していました。

あれは、「新しい歴史教科書を作る会」の流れをくむ人たち、それからどうも統一教会関係が意図的に、あちこちで流したものの。

実際、相模原の男女共同参画センターのトイレについても男女のトイレが一緒だったかなんだったか、もう忘れたけれど、笑っちゃうような嘘がネットに流れていました。

それを調べもしないでまともに市議会を取り上げようというアホもいて、辟易したものです。それから男女混合名簿については、私も当初は、大した問題じゃないのと思っていました。でも、考えてみたら「大した問題じゃない」なら、混合だっていいじゃん？ なわけ。

そもそも男女別名簿の一番の問題は、常に男の子が先で女の子が後に来る、ということでした。性差別は、それをなんとも感じないできたほど空気のように浸透していたわけですね。

ついでに言えば、桃太郎の問題は、桃子、ではなくあれはむしろ侵略の思想だろうということだったと記憶しています。

まあ、このあたりは言葉狩りの時期とリンクするものはあったのだろうけれど。

次に第3節については、なんでジェンダーフリーという二項対立から

（それが二項対立だというのは、大きな誤解だと思いますが、それはおいておきます）

エコ・フェミ論争に行くのか、読み終わってみると、よくわからない、ということがあります。

エコ・フェミ論争についてはもう、すっかり忘れてしまいました。

私の印象では、あれが専業主婦礼賛というか、性別役割分業を固定化することに繋がっていることになったような気がします。

これは、もう一度読んでみないとわかりませんが（ほんとに忘れてる！）。

もっとも私の場合、もともとエコロジーを標榜する運動は、嘘臭くて嫌い、ってこともあるけれど。

あの頃「活動専業主婦」なんて言葉もありました。

そんなことができるのは上層の男と結婚した主婦だけで、

エコロジ運動にまい進する主婦は、環境を破壊する企業で働く夫の稼ぎで暮らしている。と、これは、今も時折出てくる話ですが。

いずれにしても、青木やよひさんが忘れられていったのには

上野千鶴子という論客がいたこともあるかもしれないけれど、

それ以上に、日々生き難さを感じている女性たちにはフィットしなかったということでしょう。

「母性」なるものが、どれだけ女性を縛ってきたか、いや、今だって縛っているか。

で、「母性とエコロジ」の節について、ファイアストーンはどうでもいつけや、

それが技術の発展によって現実のものになったというのは、うーん、そつなの？ です。

優性品種については、クローン技術なんかが生まれる前から常に顔を出しています。

戦時下の日本では、「国民優生法」という法律ができていて、

結婚する際に、精神障害者がいるかいないかをはじめ、さまざまなチェック項目が示されて

「これからの結婚はこのように」と指示されています。

戦争の比較的早い時期に『写真週報』だったかな、

なにしろ国のプロパガンダ雑誌に掲載されていたmす。（原文ママ）

墮胎だって、基本は、胎児に障害、病気がある場合、でしょ（正確ではないけれど）。

日本では経済的理由も合法化されているけれど。

それから絶対的貧困による子どもの売春は、戦時下日本でもありました。

それを斡旋する紹介所もあって「娘を売りたい人は」という看板までありました。この写真は、かなり有名です。

根底にあるのは、年齢を問わず女性の性を搾取する男社会でしょう。

技術の進歩がどう使われるかは、歴史性に基づく思想に支配されます。

そこをきちんと捉えておかないと、従軍慰安婦の問題も捉え損ねる、という外交問題に切り縮められてしまいます。

ベトナム戦争の問題は、いや、そういう問題か？ という気がします。

ちなみに、男女共同参画法という名前は、当初は男女平等法として立案されたのですが、自民党のオヤジたちが嫌がるので、このようなわけのわからない名前になりました。

男女共同参画なら、いかようにも理解できる。

性別役割分業に基づいた参画だってあり得るわけです。法律の条文まで読む人はごく僅かです。から。

これ、英訳されるときは男女平等法になるということですよ。

さて。フェミニズムの一番の課題は、現実には、女性差別があるということです。

それが、女性を生き難くしているし、実は、男性も、でしょう。

一方で、女性もまた、男社会の価値観を内面化している。もちろん、私もそこから自由ではありません。

そりゃ、もう、マルクスを待つまでもなく、当然でしょう。支配しているのは男社会の論理なのですから。

もう一つ言えば、フェミニズムの命題に「個人的なことは政治的である」があります。

現実の社会矛盾に働きかけたり、環境保護の運動を担うのはいいけれど、

その大前提に大切なのは、天下国家ではなく、「私」から始まること。アトミズム？（笑）

「私」が感じている生き難さは社会的な問題につながっているという発見です。

私は、まったく個人的に、ですけど、フェミニズムの衰退はそれが「女性学」になってしまったことにあると思っています。

アカデミーとなることで、女性の実存から離れてしまった。

大学で女性学を教えている女性教授が家では夫の世話をしていて、そのことになんの矛盾も感じていないという話はもう、笑い話にもなくなりました。

「ああ、そうなのだ、私は怒っていたんだ」という発見は、女性学からは出てこない。

それでも、フェミが変えたことはたくさんあると思っています。

とまあ、いろいろ書きましたが、一番の問題は、このように書いたものが組織内できちんと議論されなかったことです。

せめて地区で議論されたのかどうか。

戦旗には理論はあっても思想はなかったと、しみじみ思うのだけれど、その「思想」とは、こうしたことを一つひとつつていねいに議論していくことから積みあがっていくのではないのでしょうか。

おお。仕事せねば、出かける時間になってしまふ。

逃避行動、これにて終了です。

森

森絹江氏の感想に対する応接

森さま

昨日は来ていただいて、どうもありがとうございました。

最後は●さんの恋バナになってしまいましたが、とても楽しい一時を過ごせました。

その上、私の拙い文章を読んで頂き、おまけに指摘までして頂いて、大変刺激になりました。

まず、コピペ文化旺盛の折、確かな裏付けのないままにネット情報を鵜呑みにしてしまったことについては、とても反省しています。

その上で、この文章を書いた経緯を言いますと、まず「エコフェミ」に関するくだりを15年ほど前に書き始め、ジェンダーフリーのトピックを付け加えるという具合に、後付けしていったので、全体としてまとまりのない論旨になってしまったのではないかと思います。

ご指摘のように、支部なり仲間なりで討論していけば、もっとすっきりとした形で提出できたもの、と思っています。

当時から私の思いとしては、「モダニズムの乗り越え」というテーマを設定して、幾つか文章を書き

溜めていったものですから、いろいろなトピックの中のひとつという位置づけしか与えられなかったでしょうね。

昨日も雑談の中で言ったかも知れませんが、「近代の超克」というのが私のライフワークであると思っていますので、それはそれとして折々書き留めていきたいと思っていますのですが、もう提出する組織もありませんので、どこまで行っても自己満足の領域を超えないと思います。それはそれで寂しいことだと感じます。

今回はお忙しい中お付き合い頂きまして、本当にありがとうございました。機会がありましたら、また是非皆で一緒にできたらと思っています。

それでは、また。

森絹江氏からの返信

おはよう。

昨日は、なんとかすべての予定をクリアしました。

で、そーだ、忘れてた。一昨日はごちそうさま！でした。

私は、しばしば、このあたりを忘れる。

論文については、なるほどね、です。

フェミの文脈で読むのと、「近代の乗り越え」の文脈で読むのでは、だいぶ違います。

「近代の超克」というと、どうしても過去の著名なる思想家（？）のと廣松に限定して考えてしまうんですが、私は、廣松はほとんど読んでいない。

ポストモダンズムでいえば、私はどっちかっていうとポストコロニアルに引きずられます。

フェミでは、私の場合、歴史的には母系制から父系制へという、近代以前に遡ってしまうので、ここですれ違うわけですね。

エンゲルスのいう「女性の世界的敗北」ってヤツです。

議論は、今からだって三多摩の仲間たちとできるんじゃないかと思うのだけれど、それはさておき、そういう場は大事ですね。

私がやてる文章講座がなんで終わらないのかというと、皆さん、結局は、そういう議論（といっても、難しい話ではないですが）のできる場がほかにないというところに尽きるようです。イスラムについては、この間も言ったように、私は何かあるたびに勉強してわかった気になるのですが、すぐに忘れてしまう。

ただ、今回、なんかグサッと来るものがあつたのは、

最初のメッセージの、「日本の国民は考えろ」と、まあ、そんなようなことを言っていたからだと思います。

以来、日常なるものに違和感を抱きつつ、日常を生きている感じですね。

では、また。これへの返信はお気遣いなく。

補論・「男性」の解放をめざして

このタイトルを見ただけで、「正気か」という反発を買うかもしれない。「男が解放されていないというのは、只のエゴよ。」などと、覚めた言葉を投げかける女性が多いのではないだろうか。しかし性差のパラダイムをこえるという本稿のテーマ上、どうしても避けられない問題だと私は思う。

しかし最近コミュニケーションギャップだとか、現実には解放されない男が結構巷に溢れている。その証拠に最近のフェミニズムの理論書の中には、「男の解放」ということを、堂々と掲げている本もあるくらいで、少なくとも社会的な広がり徐徐にもちつつあることだけは確かだ。

さらに驚くべきことに、一九七〇年代のアメリカでは早くも「男性解放運動」が起こっているのだそう。その主張は、女性解放運動の広がりの中で女性の側からの性差別の指摘を受け止めつつ、加害者としての「男性」ばかりではなく、(心理学者ジョン・マナーの主張するジェンダー・ロールによって)男性にもたらされる、社会的な不利益を俎上に乗せようとするものだったという。(注1)

具体的にはベトナム戦争以降の不安定な世相を反映して、LGBTQ+といった、性的変質をもたらし社会的な要因の解明に当てられている。——ここで誤解しないでほしいが、現在の「男性解放論」については、その研究分野からしてフィールド・ワークは多岐に渡る。例えばダブル・インカムな家庭が増える中での、「夫婦」の役割の見直し(ハウス・ハズバンドの提唱など)という研究も活発に行われており、「男女の共生」というよりは社会的多様性に向けた動きとして実に興味深い。

現在のジェンダーを巡る状況は、ノーマリゼーションの浸透の中で、例えば渋谷区など「パートナーシップ」を認めるという自治体が徐々に増えてきているし、二〇二一年の三月には札幌地裁で、同性どうしの結婚を認めない民法の規定が、法の下の平等に反すると、同性カップルが結婚の自由を求めた一斉訴訟で、初めての違憲判断が示された。しかし、実際には「アンタッチャブル」な領域というイメージが根強くあって、そういった状況を変えていかなければならない。

ともあれここでは、渡辺恒夫氏の『脱男性の時代』より、男性ジェンダーの疎外について見ていきたい。渡辺氏はジェンダー阻害（渡辺氏はこれを「病理」と呼ぶのだが、その認識は流石に時代遅れだと思う。）の原因を「彼らが女性を愛することができないのは、女性と密接な関係を結ぶことによって、相手の女性性に同化されて、自分の男性性を失ってしまうのではないかといった不安・恐怖を、意識的無意識的に抱いているから」（注2）と分析する。

つまり社会的・文化的な「男らしさ」というサンクシヨンのもとで、自分を律することのできない男性が同性間恋愛を志向してしまうのだそうだ。そしてこのような性の自己認識の障害を生み出すアイデンティティの不在を、渡辺氏は母親からの自立の遅れに求めている。

確かに、性自認の未確立が、「ゲイ」など性的「倒錯」を生み出しているという渡辺氏の主張は、ある程度説得力のある話だ。そしてその原因が現在では核家族化の問題であったり、受験一辺倒の教育制度の問題だったりしているのはあながち間違いではないだろう。しかし私はそういった現状解釈に終わってしまっているのかと思う。これでは「同性愛」という行為の解明で終わってしまって、来るべき多様性社会への展望が開けないではないかと。

そもそも「ゲイ」や「レズビアン」である原因が、アイデンティティの揺らぎというだけで片付けられてしま

ったら、何より当の本人たちが全く救われなくなってしまう。私はそういった発想の根底にある、異性との恋愛がノーマルで、同性との恋愛はアブノーマルだという図式が、差別を生み出す原因ではないかと考える。

現在ではマツコ・デラックスなど「オネエタレント」が、テレビのバラエティー番組で支持を集めているし、彼ら（彼女ら）自身がLGBTQ+であることに誇りとプライドをもっている。LGBTQ+の社会的な発言権は間違いなく増えてきているのだ。しかし社会における差別の構造は実に根深く、二〇一五年に一橋大学で同性男性に告白された学生が周りのLINE仲間にその事実を暴露し、告白した男子学生を自殺に追いやってしまった。（「一橋アウティング事件」アウティングとは意図的に同性愛者のことを第三者に話してしまうことである。）必要なのは草の根の「アライ」(ally ≡ 味方)が広がることで性自認に関する無知が解消され、寄り添いあって生きる共生の社会を実現していくことであろう。

青木やよひ氏が言っていたように、「女らしさ・男らしさ」というステロタイプは、生物学的性差を固定化するものであって、決して自由な共同社会の形成を意味しない。現在ではユニセックス化（≡両性具有）が進み、最近では、歌手の宇多田ヒカルが自分のことを「ノンバイナリー」だとカミングアウトして注目されている。自身の性自認・性表現に「男性」「女性」という、枠組みを当てはめないセクシュアリティを持つ他者に向かって、前近代的・粗暴な態度で「お前、男らしく（女らしく）しろ」などと果たして言えるのだろうか。

注1ー 勁草書房、『フェミニズム・コレクション―理論―』p.94

注2ー 同 p.97